秋田県における風疹調査成績

須藤恒久（秋田大学医学部微生物学教室）

研究目的

昭和５０年に始まった今次風疹流行は，我国における最後の自然のままの風疹流行と思われるので，その全貌を可能な限り詳細に把握し，今後の我国の風疹対策の資料となすべく疫学的，ウィルス学的研究を行った。

研究方法

1）主としてHAIによる風疹様発疹症の診断（中枢神経合併症，妊婦の風疹罹患者の確認，及び先天性風疹の疑われる症例の確認を含む）と病日推移の検討。

2）HAIによる成人女性の風疹免疫の有無判定（生活指導を含む）と集団免疫調査。

3）風疹流行後の学校における侵襲度合の検討と要ワクチン接種者の確認。

研究結果

1）風疹流行の推移

秋田県における風疹流行の推移を，我々が確認した風疹症例９５３例の年月別推移と，県及び国の届出数を対比してみると，風疹流行は，明らかに夏期には減弱し，春先から初夏にかけて拡大している。3年目の昭和５２年９月以後，完全に消滅した如く思われる。但し，極めて少数の発生は，昭和５３年にも起こっており，２例（秋田市，大曲市各１例）を確認した。

2）風疹流行期間中の臨床的風疹の診断確定率の算出

我々が昭和５１年１月より昭和５２年１２月までに扱った臨床的風疹様発疹症例のペア血清採取者1,０９９例のHAIによる風疹確認数と確認率を，年月別に検討したところ流行極期に９０％以上の適合率をみた時期もある（52−4，51−6，51−7）が，減退期には適合率が低下して来る。2年間の月別平均値は８２％であった。

これを年令別にみると，０才〜２才は風疹の頻度５０％にみたず，他の発疹症の確率が高い。３才〜５才では７０〜８０％，６才１６才では８０〜９８％と高率で，この年令が最も罹患したことが判る。１８才以上２９才までは７０％の確率であったが，３０才台では３０％，４０才以上では１０％であった。なお，最低年令は5カ月児で最高年令者は，４０才の一男性例で，娘の罹患後発症したものであった。

3）風疹抗体価の推移について（特に抗体上昇期間について）

先に報告した如く，風疹抗体価の上昇速度は，極めて速かであって，発症から6日を経たものでは既に，最高値に近くなっていることを再確認した。

我々が昭和５１年〜昭和５２年にペア血清により，風疹と診断した９０１例中，採取病日の明らかな血清1,５６７件のＨＩ価の病日別推移をみると，発病後4日目まではＨＩ価は低価で（平均$2^{3.05}$）であったが，5病日以後は急速に上昇し５〜７病日には$2^{6.16}$〜$2^{7.56}$に達し，８病日以後は平均2^{8}台を持続した。

4）中枢神経合併症について

本流行中，秋田県内に於ては１２例の中枢神経症状を呈した風疹症例の発生を，県衛研との協同検索により確認した。１２例中１例は，検査以前に既に死亡しており詳細不明であるが，他の１１例は血清学的にも風疹罹患が確認され，その中の５例の咽頭より風疹ウィルスが分離された。他のウィルスの分離された症例はなかった。また，これらの１１症例はすべて，完全に治癒しており，所謂「風疹脳症」であったと思われる。

5）妊婦の風疹罹患者及び妊娠時の抗体検査で高ＨＩ価を呈した例とその経過について

a）風疹罹患妊婦について

昭和５１年～５２年中に，秋田県内に於ては39例の風疹罹患妊婦が認められた。尚，これは我々が確認した２３例と，県衛研で５２年３月までに認められた１６例を含めたものである。

これにおいて注目すべきことは，県内の一地域即ち大曲，仙北地区に多発していることと，２６才に多発していることである。大曲，仙北地区については，同地区の成人の抗体保有率が他の地区に比して低値であることから流行前からこのことを予測して警告を発していたことであった。また，２６才において多発していることの解訳については後述する。

我々が診断した２３例については，アンケートにより経過を追跡したが，２～３カ月での罹患例は殆んど中絶し，４カ月以後の例は出産しているものが殆んどである。尚，現在までの処，ＣＲＳは認められていない。

また，妊娠中に抗体検査を受けた際，１２８倍以上を示したもの（８１例）についての追跡調査を行った処，８１例中，人工中絶１８例，自然中絶５例，出産７例，現在妊娠継続中６例，不答不明４５例であった。高値を呈した原因と思われる感染源については，家族内，職場内に多く，これらの明らかな例に中絶が多かった。また，出産したもの７名中に，明らかなＣＲＳは認められないが，早産の例と斜頸＋ＶＳＤの１例があった。（本例は出生後抗体測定で，ＣＲＳ否定）。これについては更に追跡する予定である。

6）風疹流行後の抗体保有率について

ワクチン接種前の中学生の抗体保有率について，風疹ワクチン接種に先立ち，県内２カ所の中学生について抗体検査を行った結果，一校に於いては６９％，他の一校では逆に３８％と低率であり，今回の大流行においても地域差が明らかであった。

しかし，流行中に風疹罹患(+)と答えた例については８８％に合致しているが，なお１２％のモレがあり，また前回の流行による保有者が15～30％存在するので，接種前の抗体検査が理想的と考えられる。

7）成人の抗体保有率について

昭和５１年及び５２年中に抗体検査を依頼された女性2,699例の年令別抗体価分布をみると，この結果注目すべきことは，今回の流行中に感染したと思われる１２８倍以上の抗体価を示したものの頻度が１６才～１９才で２８％，２０才１７％，２１才２３％でありながら，１６才～１９才ではなお保有率６5.6％，２１才７5.5％，と８０％にみたないことである。また，妊婦で最も罹患者の多かった２６才において，抗体検査群においても，×１２８以上が16.1％と２０才台では最も高率を示した。このことは，前年の調査において２５才群が他の年令に比し，約５％低率であったため，我々が同年令群に対して警告を発したことが如実に現われたものの如くであった。

総　　括

昭和５１年～昭和５２年にわたる我国で最後の自然のままの風疹流行において，女性の抗体検査の結果による生活指導を行なうかたわら可能な限り詳細に流行を分析した。

本成績を今後更に流行後の追跡をも行ない，今後の風疹対策に資したい。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究目的

昭和 50 年に始まった今次風疹流行は,我国における最後の自然のままの風疹流行と思われるので,その全貌を可能な限り詳細に把握し,今後の我国の風疹対策の資料となすべく疫学的,ウィルス学的研究を行った。